チーム数を増やせば増やすほど一試合当りの観客動員数は減るのはやむを得ない。それを喰い止めるのはサッカー籤ではなく試合の内容だ。

日本代表の選手の決定には日本的ニュアンスが付き纏うが、選ばれた人は頑張って欲しい。ベテランも必要だが体力に劣る日本としては若手の運動量のある方が良いのだろう。

この間、あるコーチの話を聞いたが、日本選手はすぐに外人選手に合わせてしまうので日本の特徴あるサッカーが作れないと云っていた。サッカーは格闘技である。外人選手は勝ちにこだわり、ずるい（審判の目の届かないところでは平気で反則をやる）。

その点、日本の若手選手は過保護に育っているし、生活がかかっていない。プロの域には達していない。それを助長するのが、マスコミだ。

2002年は主催国として出場出来る訳だが、真に強いチームになることを祈る。

5．雑感

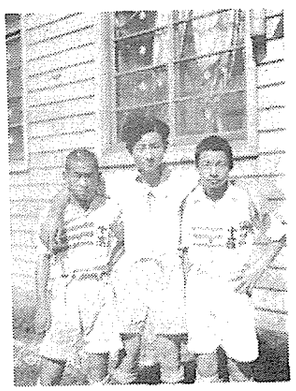
知名度の低いスポーツに携った者として、今の隆盛は感無量である。今でも若さを保っていられるのはサッカーのお陰である。無口で話し下手でキカン坊だった私が、多少なりと人様の前で偉そうな事を云えるようになったのは、目標に向かって努力したこと、そしてチームを率いて勝った事による自信が私を育てたと思う。

私は会社の若手の育成に際して常にこのことを云っている。

日本経済が不況に遭遇しているが、日本の力がなくなった訳ではない。自信を持って新時代に対処しよう。

(98. 5 記)

昭和24年10月23日　記念祭の日に



昭和25年1月8日　2期生の卒業記念撮影

当時のユニフォームは自前のシャツに赤線を3本つけて左胸に十高と入れていた。ストッキングだけはえび茶に白の折り返しのものをそろえていた。

西高通学50年

西高3期　寺田　格郎

私たちが現役のころは旧制東京高校サッカー部の方々の指導を受けた。コーチとしては黒田尚次さんが最初である。それ以前に黒田さんの先輩に当たる福田さんや旧制一高OBの村瀬さんに指導をしていただいたこともある。東京高校も一高も東大に入った彼らの先輩たちの指導を受けていたから、私たちが教わる基本は東大サッカー部の練習と同じような内容だった。当時はサッカーといえば東大、といわれるように東大は強かったし全日本代表に多くの選手を輩出していた。もちろん早慶明などにも名選手がいたので高校時代は大学リーグを観に行き彼らのプレイに注目したものだったし、国体予選や各種の選手権大会などではベルリンオリンピック代表だった選手の技を堪能することもできた。

黒田さんのコーチは西高1期から3期にかけてだったが、名古屋大に進学されてからは合宿に顔を出して下さる程度になった。それ以来、西高サッカー部はOBの指導で育ってきたといえる。進学して体得した大学サッカーの息吹を母校に伝えるOBが誕生したからで、当時は大学サッカーの練習方法や技術が日本のサッカーの先端だった。日本がドイツからクラマー氏を招いたのは数年あとの話だ（1959年のこと）。

西高が旧制東京高校の指導を受けたのは十中7期卒（1期と同期）の土岐・秋岡両先輩が東京高校に進学したからである。次いで1期の関彦太さんが東大工学部に、2期の城戸昌夫さんが教育大の体育学部に入った。西高ではGK専門だった城戸さんが教育大ではCFとして雨中の試合で怪我を負いながらも活躍したという輝かしい話を御当人から聞いて、私は心弾むものがあった。進学してもサッカー部に入らなかったOBや浪人OBも西高に来て後輩を指導して下さった。現役の面倒はOBがみるといったようなOB意識だが、西高にサッカー専門の指導をなさる先生がおられなかったのも一つの理由でもあろう。

私は早大でサッカー部には入らなかった。東伏見のグランドに毎日通わなければならないし、文学部ではあるものの授業との兼ね合いや経済的な理由もあった。でもサッカーは続けたいので地元の杉並サッカークラブに入った。杉並クラブは日本協会の役員で荻窪駅近くの歯科医の福島玄一氏が主催していたので一人でお宅を訪ねてみた。昭和26年4月のことで、福島さんは見ず知らずの私の訪問にもかかわらず快くクラブに入れて下さった。高山英華、二宮泰、松浦厳、則武謙、竹島弘、松永碩といった全日本代表クラスの選手が杉並区にはごろごろ住んでいたから高校を出たばかりの私はそのような方々と一緒にサッカーをしていると自分まで上手くなったような気がした。早大理工学部で勉学一途の1年先輩の高村真司さんも杉並クラブにお誘いした。彼は華麗なシュートを放つゴールゲッターだった。私たちは杉並クラブを中心とした区の代表にも選ばれて都民大会に出場し何回か優勝している。いずれの区にも一流選手が出ていたので私は往年の名選手高橋英辰、加納孝さんらに振り回された思い出もある。当時の都民大会は選手の資格を限るようなこともなかった。私たちのあとも杉並区の代表となって活

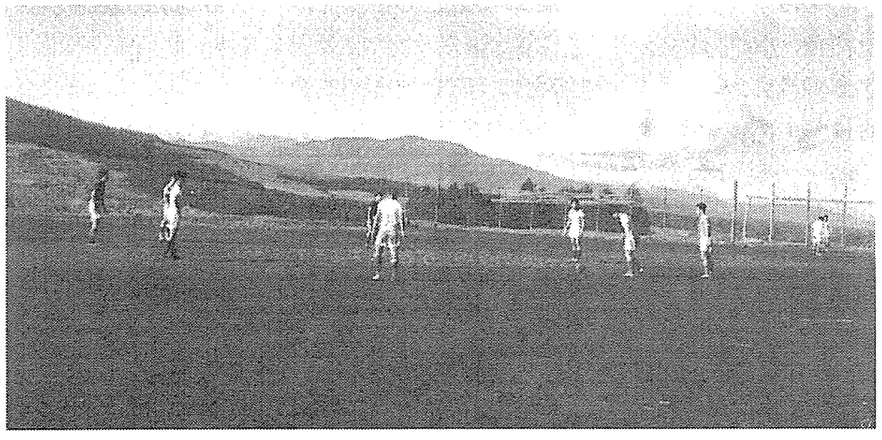
躍した西高OBは沢山いる。

OBになった私はこうして得た体験を後輩の指導に充てた。後輩たちとボールを蹴るのも楽しかったし私自身の練習にもなった。しかし、一度だけもう西高へ行くのはやめようと思ったときがあった。まだ学生のころで、なぜだったのかは忘れた。城戸さんに「あとの指導は誰がするのか決めたんだろうな」といわれたのは憶えている。その一言でやめるのを思い留まった。後輩の中で私のようにしょっちゅう西高へ顔を出す物好きが見当たらなかった。50年パーティの席で私の今日ある思い出として「あれ以来ですよ」と城戸さんにこの話をしたら彼もちゃんと憶えていらした。私の場合は家から自転車で楽に行けたからでもある。西高通いが続いたのは、はじめは高校や予備校の講師稼業で時間があったし、その後、NHKに勤めてからも休日出勤や泊まり勤務で週日の昼間が空いていたからでもある。「あの人、何しているのだろう」と思った現役諸君もいただろうなと思う。もちろん私も就職、結婚、海外勤務などで50年の西高通学には歯抜けの部分もある。しかし、いなければいないで後輩OB諸君がきちんと西高の指導をしてくれていた。これからは君頼むよなどといわなくても後輩OBは動いてくれるものである。城戸さんの一言など忘れてしまったし、引き継ぎなどは杞憂に過ぎないような環境が生まれてきていたのだと思う。よし俺が、と采配を振るってくれた後輩OBには感謝しているし、鬼コーチは私だけではないと思っている。現役は厳しい指導をするコーチをみな鬼と思うだろうが、同じ鬼でも先輩には親しみがあるのではないだろうか。著名なエッセイストで数学者の藤原正彦氏（14期）は、練習で「疲れているのはおまえだけではない」とコーチに怒鳴られたと書いていたが、私は確かにその通りに彼を怒鳴った。13期の田代忠之氏が現役時代に「寺田さんのは疲れさせる練習だ」とぼやいたこともある。鬼といわれたころの私の練習はきつかったようだ。彼らはその後もサッカーを続けてくれたが、私の不用意な一言で傷つきサッカーから遠のいていった後輩諸君もいるだろうなあと、いまでも昔を思い出して後悔すること屡々である。

私が暇をみては西高へ出向いたもう一つの理由として岡田信吉先生のことに触れたい。岡田先生については多くの卒業生が書いているし、サッカー部との関わりなどについては西高創立50年記念誌にやはり部の顧問だった星野五十夫先生の名文がある。

岡田先生はもともとテニスがお好きだった。一時、講堂の一室にお住まいで授業が終わるとテニスコートの練習をご覧になっていたが、いつの間にかサッカーの練習を熱心に見つめられるようになった。サッカーに関心が移ったのですとおっしゃっていた。2年生の6月ごろであったか先生が私の家に突然お出でになった。先生の御親戚が荻窪病院の近くに住んでいらしたので、こちらの方へはよく歩いて来られていたようだ。応接間での長い時間の雑談のあと、母が作った冷や麦を美味しそうに召し上がった。「先生はお幾つかしら、ずいぶん昔のことを御存知ね」と帰られたあと母がいった。先生との個人的な行き来の始まりである。先生は博識だった。文学は古典から明治時代の小説に至るまで、そして音楽にも造詣深くアパートの部屋ではラジオからクラシックの曲が流れていた。先生の数学は中3のときに幾何を習ったが、先生は私を教えた記憶がないといわれた。私は数学が好きではなかったしあまり出来るほうではなかったので正に幸いだった。しかし、先生は卒業生の名前を聞けば直ちにあの子は何回生で

（先生は何期生とはいわれなかった）勉強が出来たか出来なかったかまで言い当てる記憶力非凡な方だったから、出来なかった私のことを敢えて憶えていないとおっしゃったのかも知れない。先生がサッカー部の顧問になられたのは私の卒業後だったと思う。新鹿沢の合宿ではOB同期の中島裕氏の練習があまりにも厳しいので、生徒を気遣い脇でおろおろなさったような優しい方であった。その合宿で先生が撮して下さったいい写真が沢山残っている。間借りしておられた久我山の部屋や西荻窪のアパートへ何回も伺った。雨の日も風の日も先生は練習や試合に立ち合われており、責任感溢れる熱心な先生の姿を見て私も出来るだけ顔を出すように努めた。先生お一人でOBが誰もいないのでは申し訳ないような気がしたし、先生は私の顔を見るとほっとされるようでもあった。練習が終わり「先生のアパートまで自転車のうしろにお乗りになりませんか」というと、ちょっと照れながらそして嬉しそうに顔をほころばせて荷台に横に腰掛けられた。私がニューヨークに転勤することになり西荻窪の“こけしや”で昼食をご一緒した際、先生は凍りついた雪で滑るような道を歩きながら「息子みたいに思えてならないんですよ」といわれた。この言葉は私の心に深く刻み込まれている。寒い日で先生の鼻水を拭いて差し上げた。その年の暮れに一時帰国して鎌谷の病院に伺ったが、立ち去ろうとする私に「もう帰るんですか」と病床の先生は寂しそうに口を動かされた。正に後ろ髪を引かれる思いだった。年が明けた2月のはじめニューヨークの私は同期の横倉千穂氏からの電話で先生の死去を知った。



昭和32年8月13日～新鹿沢合宿
岡田信吉先生撮影。先生はこの他にも
沢山の写真を撮してくださった。

去年（1997年）の12月のこと、星野先生が話の途中で「大相撲の土俵の塩は岡田先生のお生まれになった伯方島の塩だそうですね」と、ふとおっしゃった。岡田信吉先生はいつまでも私たちのどこかにいらっしゃるような気がした。

こうして私は西高へ通い続けたので多くの後輩連中との交流が生まれた。それは個人的な交際から仕事に関わることなど、あちらこちら海外にも及んでいるし、仲人を務めたこともある。何しろ兄弟みたいな後輩との関係が息子や娘、そして今や甥姪さらに孫のような世代となった。育ち行く後輩たちといつでも友達気分でいるところに私がいつまでも西高へ通いつめる理由があるように思える。

（98.1記）

サッカー部の土台を築いた先輩たち

西高3期　寺田　格郎

終戦直後の十中1年の秋頃だったか、体育の時間にボールを蹴ったら小河原巌先生から「なかなかいいキックだ」といわれた。当時は全面が赤土で中学生の私にとっては広大なグランドだった。戦争に負けて食べるものも碌になかったのに、学校にはサッカーボールが2個あった。先生のこの励ましの一言が、のちに私がサッカーに引きこまれるきっかけとなっていたのは確かだ。同期では安藤、柿沼、土屋そして中島といった諸君が十中時代から部に入っていたが、高校になってからは1年部員は安藤、中島の両君だけになった。昭和23年5月の新憲法発布を記念する大会を前にサッカー部ではメンバーが不足していたようだ。この頃入部した名出君はすぐに大会に出ており、私が部に入ったのはそのあとである。その後、サッカーのクラスマッチなどがあって同期の部員が急に増えたが、同じクラスで机を並べていた横倉君からは「隣に座りながら、なんで俺のような上手い者を誘わなかったのか」と彼が部に入ったあとまでいわれた。

3年生は関彦太、片山不二臣、中川桂次の3氏だった。中川さんは左のインナーでボールを持てば実に安定感があった。腰をぐっと落として重心を下げドリブルする姿が印象的だった。寡黙な方で鋭さがあった。

手元の古い2枚のスナップ写真のメモ書きに「昭和21年の運動会で先生対生徒の蹴球試合があった。当時はサッカーとはいわなかった。前半、先生方がリードしていたが後半に生徒側逆転の勝ち、生徒チームは蹴球部員が中心で逆転の得点は後半から入った片山不二臣氏と聞く。得点数は不明」とある。

片山さんは「おれが点を入れたんだよな」と、このときのことを仲間同志でいつも自慢げに話していた。私も試合を見ていたが得点のシーンは憶えていない。土岐高史さんがレフェリーで、写真を見ると志村正二郎さんは長い足に軍靴だし、内野孝治さんは裸足、先生も生徒も鉢巻き姿が多く細田菊雄校長は白いおわん帽子である。(15頁参照)

片山さんはCFで勇ましかったがその反面寂しそうな影があった。2年先輩の彼は、サッカー部員となった私の家によく遊びに見えたが、応接間で他愛の無い話をするだけだった。東京経済大学に進まれてからのある日、私は同期の横倉君と梅が丘の彼の家で麻雀をして昼の冷やしそばと夕食までご馳走になったことがある。考えてみれば昼前から麻雀をしていたわけだが、晩飯は店屋ものをとって負け払いにしようと夜まで遊んだ。片山さんが負けてぼやいていたのも懐かしい。昼の冷やしそばを覚えているから6月ころだったろう。夕食も冷やしそばだったような気がするが、あとの1人が誰であったかは忘れてしまった。ゼネラル電機に就職されてからも銀座のクラブに連れていって貰ったし、一度は片山さんの段取りで熱海に旅行して芸者を呼んで遊んだこともあった。旅館の主が皆の前で一緒に行った貫禄のある横倉君に向かって挨拶したので片山さんの面目はまるつぶれで大笑いだった。2人の芸者の源氏名が大石と力、どちらもその名の如く大きく石臼のような女でこれまた忘れられない思い出である。片山さんは夏休みには学生アルバイトとして高島屋の配送の仕事を世話して下さるなど親切な方だった。新潟美人と結婚されてお子さんにも恵まれた。家を建てたいからと、ご家族でわが家を見に来られたので町田に家を新築されたときには建前のお祝いに伺った。しかしその後、片山さんは会社を随分変わられて苦労なさったようである。そのためか片山さんはまだそのような年齢でもないのに早くにお亡くなりになってしまった。私はニューヨークに滞在していたのでお悔みに伺うことができなかった。

先生と生徒の蹴球試合のスナップに写っている志村さんは、十中7回生で4年修了で水産講習所（水産大学）に進学されていたが、夏休みの練習中に鯨のベーコンを沢山持参された。そのときの志村さんは船乗りの帽子がよく似合っていた。練習のあと私たちは講堂の楽屋口の前でそのベーコンを食べた。講堂の裏に当たる東側南北の角に一つずつ楽屋があり、サッカー部はそこを部室として使っていた。当初は北側を、その後アメリカンフットボール部が発足してからは南側の楽屋に移った。志村さんは校庭に顔を出す度に「陸にいると潮の匂いが恋しくなるよ」とよく口にしておられた。

志村さんや土岐さん内野さんらの旧制先輩とは、グランドでともに汗を流したわけではなかった。旧制と新制の端境期で同期の彼らの内3人が新制高校3年に残り、旧制高校に進んだ連中が時折母校を訪ねて来られていたので私たちも顔を知るようになった。お世話になったのはサッカー部を通じてのこのような先輩後輩の関係である。昭和28年（1953年）になって関彦太さんが三菱造船、本領泰弘さんが播磨造船とそれぞれ就職が決まり、3月15日に土岐さんのお宅でお祝いのコンパが催された。私たち後輩もOBとなっていたのでその席に招かれた。集合したのは18人で、その場で初めてお目にかかった先輩西尾定夫さんもおられた。

コンパを土岐さん方で開いたように、土岐さんは昔から面倒見の良い先輩だった。進学先の旧制東京高校のサッカー部の方々を母校に紹介して新風を引き込んで下さった。これを契機として西高は東大サッカー部の練習方法を取り入れるようになったといえよう。旧東京高校の練習が東大のそれを踏襲しているのだから自ずとそうなる。西高サッカー部の準備体操は現在もこのときに習った型が引き継がれている。土岐さんは私たちの合宿の世話をして下さったし、東大を出て小野田セメントに勤務のころはその会社のチームと西高OBとの試合を斡旋していただいた。OB会の会長時代には下北沢のお宅で幹事会を何回も開き、後輩OBたちの意見に耳を傾けられた。しかし、いつの間にかその集まりも途絶えてOB活動もやや停滞気味となった。土岐さんもなにか御都合があったと思われる。もう5～6年以上も前のことだが、同期の中島君が「西高の現役が弱いのはOBがだらしないからだ」と声を掛けてきた。卒業以来、暇があれば現役を見てきた私も仕事の関係で西高とは御無沙汰していたが、勤務の上でもやや余裕ができてきたので、土岐さんに替ってOB会に力を注ぐことにした。そのすぐあとか、土岐さんは勤めを退かれて悠々自適の生活に入りサッカー部50年記念誌に取り組んでおられる。それだったら会長は土岐さんで通すべきだったかと思っている。

土岐さんと一緒に旧制東京高校に進学した秋岡武承さんは右のウイングだった。西高グランドで球乗りをして右足を骨折されたのを覚えている。OBになられてからのことだ。練習試合

で秋岡さんの右からのセンターリングを私は戻りながらジャンプして頭の右側で受けた。とても間に合わないと思いながらだったが偶然頭に当たった感じで、すごく痛かった。秋岡さんのキックは強力だったとの印象があるのはこのときのことだ。ボールはゴールラインを割りコーナーキックとなったが「格、ありがとうよ」とピンチを逃れたCH関さんの声が聞こえた。秋岡さんは医師になられて千葉にお住まいである。

内野さんは国分寺市の教育長である。昔はいつも腰に手拭いを下げていたような正に旧制タイプの方だった。裸足で鉢巻きサッカーのイメージである。勉強家だった。岩波文庫を全て揃えてあると聞いていたので、国分寺駅北口のお宅に伺ったときに本棚に目を向けた。文庫本は雑然と並べられ、ほとんどの本の角が折れまがっていた。一見してこれは揃えてあるのではなく読まれたものだと思った。サッカーの手解きは受けなかったが、この方からは別の大切なことを学んだ。

本領さんは旧制早稲田高等学院から大学理工学部に進学されたが、その間、私たちの夏の練習やOBチームの試合などに顔を出して下さった。父君の信治郎氏は、昭和2年に早稲田のラグビー部がオーストラリア遠征をしたときの主将だった。これは早大ラグビー部として最初の海外遠征で、当時は奇想天外な企てと大反対を受けながらも実現した実行力のある主将だったと日本ラグビー史に詳しく書かれている。結果は5戦全敗だったが、早稲田ラグビー伝統のゆさぶり戦法はこのときに学びとったものといわれる。そういえば本領さんのスパイクはラグビー用だった。先輩の本領さんのことを私たちはサッカー部の後援会長と呼んでいた。このような福々しいあだ名がなぜつけられたか理由は忘れたが、皆でそうだそうだといったのは覚えている。私たちが喜ぶような寄付をして下さったのではなかったかと思う。亡くなった関彦太さんから本領さんの家は東中野で牧場を経営していると伺ったので裕福なのだろうなと内心思った。上の山牧場という名前だったと記憶するが駅からちょっと中野寄りのあたりで、当時は東中野もそのようなところだった。数年前に、西高サッカー部OB会に私が気を入れ出した際、本領さんはぽんと大枚を寄付して下さった。そのお金はOB会に大いに役立ち、やっぱり後援会長だと私は感謝した。本領さんは沼津で今もシニアサッカーで活躍なさっている。

私がサッカー部に入ったときのキャプテンは関彦太さんだった。桃太郎さんのような丸顔で身体も大きかった。ポジションはCHでチームの要としての信頼感があった。現在とは違いFW5人、HB3人そしてGKの前に2人のFBというシフトの時代で右が横倉、左が私だった。私たち2人のFBは両サイドHBとローテーションなどの連係プレイで守備を固めるのだがその中心は関さんである。1年生の私はミスをしても、関さんがカバーしてくれるので安心してプレイすることができた。思えば関さんの練習もきつかった。秋から冬になるとすぐに暗くなる。ボールに石灰を塗って遅くまで練習をしたこともあるし、ボールが見えなくなると暗くてもできるからとグランドを何周もさせられた。練習の最後はグランド3周ぐらいだがそこまでくると「あと1周」という。これで終わりかと思うとさらに同じ声がかかる。くたびれている上に7周から10周もさせられたこともあった。関さんは大柄だが1年の私たちはまだ身体が小さい。しかし関さんはこうして部員に自信と体力をつける訓練をしたのだと思った。

話は前後するが1年の夏休み中のこと、練習に出掛けようとしていたら安藤君が突然やってきた。「3年の連中の練習が厳しいので、今日は1年全員ストを決めたから練習に行くな」という。私はストをするほどでもないと思ったが、彼の言葉に従って行くのを止めて家で雑談をした。1年部員の多くは井の頭線の電車通学で、私だけが方角が違い徒歩通学だった。ストは電車通学の連中で決めたらしく、それで安藤君は私が知らずに練習に行くとまずいので止めにきたのだった。次の練習日、私は3年部員が怒るだろうなと内心びくびくして出向いたところ、関さんは「1年が誰も来ないんだもんなあ」と笑顔でいうにとどまったのでほっとした。

早大に加茂健・加茂正五という兄弟の名FWがいた。2人ともベルリンオリンピックの日本代表選手である。関さんはこの方々の甥だった。加茂さんの姉が関さんの母親だったと思う。御母堂は眉と目のあたりが加茂さんそっくりで細面でいらしたから関さんの丸顔は父親似か。関さんがサッカーを始めた動機はこの叔父にあったのではなかろうか。

戦火で焼け野原となった小石川竹早町にぽつんとトタン屋根の小屋があり、1人の親爺がこつこつとサッカーシューズを専門に作っていた。その名は安田靴店、現在のスポーツ専門店CRIXの前身である。当時の値段は1足2,000円で高かったが、私たちはその店に靴を注文した。親にしてみれば家計に響く値段である。注文だから型取りに足の大きさをとるが、そのやりとりの中で、安田の親爺は十高と聞くと（そのころはまだ西高とはいわなかった）「加茂さんの甥御さんがいるんだってね」といった。そういわれると嬉しく思ったりもした。話を続けて「うちの子はねえ学院へ入れちゃったよ。あそこへ入れておけばそのまま早大に進めるからねえ」と問わず語りにしゃべった。安田の親爺はサッカー靴に釘を打ちながら息子の進学を考えていたのだろうし、多くの名選手を生みだした早稲田でサッカーをさせたかったのかも知れない。余談だが、ベルリンオリンピックはじめサッカーの日本代表選手のスパイクは、おおかた安田の親爺の手によるものだったという。また息子はのちに早大のHBになった。

関さんも卒業してしまった昭和24年10月の初め、私はサッカー部をやめたくなった。サッカーを続けたい気持ちと半々だった。月曜日の6時間目の授業が終わったあと親しい横倉を誘って三鷹の関さんの家を訪ねた。武蔵野警察署の前を西に入ってすぐのところで、当時は畑ばかりだったし関さんのお宅にも広い畑があった。2階の座敷で先輩に退部の意向を伝えているうちに涙が出てきてしまった。理由も何もいえなくなった。関さんは気遣って「外へ出よう」と夕方の玉川上水沿いの道を歩きながら話しやすくしてくれた。よく考え直すよう説得されて駅まで送っていただいた。あとで横倉に「おれは何も知らずに一緒に行って、驚かすんじゃあねえよ」とぼやかれた。私は、関さんと横倉に自分の気持ちを聞いて貰い2人の意見を聞くことですっきりした気分になった。彼らの慰めの言葉がなかったら今日の私はなかっただろう。

その翌年のこと、1月5日は私の誕生日で正月でもあり家にはサッカー部の仲間などが集まっていた。そこへ突然、関さんと内野さんが「おーい誕生日だろ」といって来て下さった。2人の先輩の思わぬ来訪は、本当に嬉しかった。玄関のドアを開けたとき眼に映った御両人の姿は昨日のことのようだ。

関さんは勉強もよく出来た。通学にはサッカーシューズとジャパンタイムスを手にしていた。2年生の城戸さんが「辞書なしで読んでるなんて凄いな」といった。私が3年になりサッカーをなおも続けていたとき、担任の阿部乾六先生から「関のように文武両道はなかなかむつかし

いものだよ」といわれた。教員室前の中庭で横に名出君がいた。卒業して２年も経っているのに関さんは西高の先生の覚えが高かった。関さんは東大で船舶を専攻しサッカー部にも入って試合にもHBで出ていたが途中でやめられたようだ。三鷹駅の北口で関さんにばったり会った際、防衛庁で軍艦の設計に当たっていると聞いて東大の学生なのにと驚いたが、敗戦で軍事力など解体してしまった日本が再興しつつあるなと、ふと感じた。

卒業して三菱造船下関に赴任されると知り東京駅に送りに行った。客車の窓越しに「これを取るために努力したんだよ」と襟につけた三菱のバッジを指さした。そこに１人の女性が駆け寄ってきて関さんに一枚の写真を手渡した。写真を手にした関さんの表情を見て、私たちは遠くに離れた。若いながらもささやかな気遣いをしたつもりだった。高校の友人の妹さんと聞き、私は横倉や片山さんとその友人の名前を詮索するなどしつつ発車時間を待った。寂しそうに出発を見つめる着物姿の御母堂に気付いたが挨拶せずに失礼してしまった。

関さんは三菱造船を定年になるまでずっと彦島に住んでおられた。昭和30年10月の西高文化祭での現役OB戦に背広姿で記念写真に収まったのが母校を訪れた最後かと思う。定年後、清水の造船会社の副社長となり住居も清水に移された。平成３年７月、古いOBがNHKの青山荘に集まり、関さんも清水からこの会合に出てこられた。関さんの同期では志村、土岐、本領、内野、中川それにもう１人の関昭五さんらが顔を合わせた。思えば38年前に土岐さんのお宅で送別会をした関、本領の御両人が揃ったのはあれ以来なのではないだろうか。「格、久しぶりだなあ」と、声を掛けられてもなかなか思い出せないくらいに関さんの顔は変わっていた。改めてその日のスナップ写真を見直すとやはり随分痩せておられる。その３年後に関さんは亡くなった。癌だったと誰かから聞いた。清水での葬儀には志村さんと内野さんが参列された。私はその１年前に体調を崩して十分に回復していなかったとはいえ、この素晴らしい先輩に不義理をしてしまった。健康を取り戻した今、焼香に伺わなかったのは悔いても悔い切れない思いである。

もう一人の関昭五さんは十中時代の自治会の会長で、聡明な先輩である。私が２年生の秋、昭和24年（1949年）の文化祭（これも記念祭といっていた）で現役OB戦があり、関昭五さんはOBチームに出ておられた。この試合で、私が関さんにタックルした際にすねがぶつかり、彼は右足を骨折してしまった。キャプテンの高村さんと林檎を持参して久我山のお宅へ見舞いに伺ったが、関さんはそれが原因で折角入学した東大を１年休学された。私としては何とも心苦しくてならない。OBになって何年か経ってからお付き合いが深まったが、関さんの細心の気配りには恐縮している。関彦太さんとのスナップ写真は、この関昭五さんが撮って下さったもので実にいい写真だ。写真を見る度に２人の関さんを思い出す。

十中７期生には、他に梶川博司さんがいた。私が現役のときだったか、この梶川さんの家に行ったことがある。何の用事だったかもよく覚えていないが、OBへの連絡だったような気がする。先輩にいわれた通りの煙草店が、伊勢丹と明治通りをはさんだ新宿文化劇場の裏通りの角にあった。このような街中に住んで十中に通っていた先輩もいたのかと思った。梶川さんは店先に座っていた。眼鏡をかけておられて、見知らぬ後輩の突然の訪問にも優しい語り口だった。

もう１人、田原洋二さんがいる。この方は十中では部に入っていなかったが、大学でサッカーを始められた。東京商大のHBだった。昭和24年の記念祭にOBで出ておられる。関彦太さんと並んだそのときの写真がある。田原さんは、その後何回か西高のグランドに見えている。

これらサッカー部の土台を築いた方々を支えたのが西高２期の諸先輩だった。サッカー部の最初のゴールキーパーは２期の城戸昌夫さんだった。FWには高村真司さんと横山修さんがいたし、HBには久永勝一郎、田中宏の両氏、一年休学して卒業は３期となったが石川雅己さんなどが名を連ねていた。また十中時代から部に入っていたのが４期の小畑順正と柳沢啓三の両氏だ。西高３期の私は、人生を通じてのこれらの先輩方とのお付き合いに感謝している。先輩ばかりではない。サッカー部の同期の仲間や後輩に対しても同じ思いである。縦のつながりには心がある。

(97. 2. 3記)

草創期の合宿

西高３期　寺田　格郎

１．府中合宿（昭和23年８月23日～８月30日）

宿舎は府中の善明寺、グランドは東京農工大学、これが西高サッカー部最初の合宿だった。昭和23年（1948）８月23日からの一週間と記憶する。記録はないが、皆より一足先に宿舎に入ってしまった小松行彦君と小生が、翌朝大国魂神社境内の公衆便所に落ちていた朝刊の切れはしで、帝銀事件の犯人とされる平沢貞通逮捕を知ったのを鮮明に覚えている。平沢逮捕は22日だから、合宿は夏休みの終り近い23日からの一週間ということになる。

場所が府中となったのは、当時のサッカー部のコーチの旧制東京高校の黒田尚次氏が、地元の古くからの開業医黒田外科の次男で、全てこの方のお世話によったためである。

戦後の学制改革で、この年の４月１日から都立十中が十高となった。しかし新制度は発足したものの旧制度も残っていた。３月に進学した十中７回生と新制西高の第１回卒業生とは、中学では同期だった訳である。十中７回生の中で、秋岡武承・土岐高史の両氏が旧制東京高校に進学してサッカーを続け、それから私共後輩は旧制東京高校サッカー部の方々の指導を受けるようになった。黒田尚次氏と西高サッカー部との縁故は、ここに始まる。

合宿での練習内容は、キャプテンの関彦太さんとコーチの黒田さんの２人で決めていた。体操、ランニング、ダッシュ、ドリブル、パス、小サークルそして大サークルのキックと、基本練習のパターンは大体同じだった。

第１日目の午前、善明寺から農工大グランドまで２列縦隊で走らされた。８月の末、午前８時すぎ、夏の太陽は暑くグランドに着いた頃は、皆くたくただった。「関、これは無理だよ」との黒田さんの一声が聞えた。それ以後は甲州街道から北へ畑の中の一本道を往復とも歩くことになった。

農工大のグランドは、一面草茫々だった。午前の練習で、草の朝露が乾くまでは、スパイク

がぐちゃぐちゃになり、走ればがばりと音をたてた。土肥健君のスパイクのすさまじい音は、今でも忘れられない。

ボールの数にしても、現在のように潤沢ではなく、せいぜい7～8個で、10個にも満たなかった。ボールの空気入れも、使いにくいポンプで、力が要った。チューブの口をゴム輪で縛り、専用ニードルで皮紐を上手く締め上げる。これだけでも面倒な作業だが、出来上ったボールを各人がグランドまで抱えて行かなければならない。限られた数のボールだから見て見ぬふりをすれば、1キロ以上も離れたグランド迄運ぶ苦役を逃れることが出来る。たかがボール一つなのだが、それを苦役と思う程、日増しに疲れが出て来た。

午後の練習に出発する前だった。「おい、1年、何をやっているんだ」と3年生の中川桂次さんがいきなり怒鳴って、われわれに向かってボールを蹴飛ばした。日頃、温厚な中川さんが怒ったのはこれきりだったので、寺の本堂の前でのこの情景は深く印象に残っている。中川さんは、この合宿のあとに体調を崩されて長く学校を休まれることになる。その時、先輩の誰方かが「合宿で無理をしたから」と口にしたのを耳にして1年生の私は、あの時、中川さんも疲れていたのだなあと、合宿での一駒を思い出したのだった。

夜は、黒田コーチを囲み反省会を開いた。これは楽しかった。黒田さんは一人一人に細かい注意を与えてくれた。それが将来の私たちのサッカーに、人生に、どれだけ影響し役立ったか計り知れない。厳しい指導と合せてジェスチァ遊びで皆の笑いを誘ったり、ある時は裏の墓地を一廻りして来いなど肝試しをしたりした。また、5月5日の大国魂神社の暗闇祭りでは、毎年のように神社の裏の笹やぶで男女関係の事件がおきると、黒田さんが面白おかしく話されるのに、私たちは聞き耳をたてたのだった。今にして思えば、祭りの日の晩に自由な男女の関係が許された奈良時代の宗教的行事「歌垣」の風習が、古来この地域にもあった名残りのような気もする。

食事は全て自炊だった。自炊による合宿はこのあとの戸塚、伊香保、保谷での合宿も同様だった。そのために参加者は、寝具の毛布と米、みそ、しょう油、塩などを持ち寄った。米は3升程度だった。この府中合宿の際の記録は残っていないが、戸塚や伊香保での合宿では何を用意したのかメモがあるので、詳しくはそこに記そう。炊事場は善明寺の庫裡を使った。当番を決めて買出しもした。毎日のように茄子ばかりだったが、小松行彦君は茄子が嫌いで困っていた。食欲が旺盛だったのは田辺隆一君で、皆が食べきれないと全部こちらへ持ってこいといわぬばかりであった。

風呂はなかった。井戸で体を洗ったが、風呂屋を利用したものもいた。2年の城戸昌夫さんに呼応して山領健二君が「僕も行きます」とついて行ったのを思い出す。

ところで、合宿の目的は、9月早々に開始される高校サッカーの東京都選手権兼国体予選、それに秋の3部リーグ戦に向けられていた。東京都選手権兼国体予選の第一日は9月2日（日）だったが、試合当日、主将の関さんがグランドへは来たものの高熱のため欠場、代りのCHを2年の久永勝一郎さんがつとめた。久永さんは合宿に参加していなかったが、急のことで止むを得ない。場所は東大御殿下グランド、相手は1部リーグの都立九高（現北園高）で、結果は3－1。私たちは合宿後の緒戦を失い涙をのんだ。試合終了后、黒田さんが「主将というものはな、どんなことがあっても絶対に出なきゃいけないんだ」といった言葉も、私には責任感という意味で心に残った。九高はその後勝ち進んだが、19日の決勝では教育大付属高に6－0の大差で敗れた。付属高は福岡国体の東京代表となったが、後に全日本のGKとなった村岡さんや、東大を経て第一生命の常務となった原さんなどがメンバーとして活躍していた。

現JOC委員長の古橋広之進氏がまだ日大の学生で、水泳400mに4分33秒0、300mに3分20秒8の世界新記録を次々に達成していたのもこの年の9月の日曜日だった。また秋には、昭和電工疑獄で芦田内閣が総辞職し、第二次吉田内閣の成立を迎えた頃のことである。

府中の善明寺といえば、国宝の鉄仏阿弥陀如来で有名である。現在は重要文化財となっているが、合宿に本堂を使ったことから、黒田さんが「考えてみれば、国宝の前で寝かしてくれたわけだな」といわれたのが気になっていた。というのは、当時府中本町駅に向う通りから善明寺に入る細道に面して別の古い堂があり、そこに鉄仏と書いてあったのをその時私は見ていたからである。あれから50年近くになる現在、善明寺の本堂は改築され本堂右手前には、もう一つの大きなコンクリートの堂が建ち、ここに重要文化財の大鉄阿弥陀如来座像191cm、1253年鋳造と小鉄同立像が収納されている。私たちが寝起きしていた本堂の仏像も確かに2m近い阿弥陀如来座像だったが、こちらは江戸末期の木造で国宝ではなかった。

寺の周囲は駐車場となり、肝試しに夜中早走りで巡った墓地も数基の墓石が整然と並ぶのみ、当時の面影は全く残っていない。寺の正門前の土手下には南武線が走っている。合宿中のある晩、安藤泰吉君に見張って貰いながら大便をしたその土手だけは、今も昔も変らない。

しかし、京王線府中駅に程近く線路の北側、欅並木に面してあった黒田外科医院はすでに無い。小豆アイスなどを食べた菓子の青木屋付近も、再開発で巨大ビルに生れ変ろうとしている。神社の笹やぶも、整然とした柵に遮られてしまった感じがする。くらやみ祭りが近づく度に思い出す、今や昔の語り草、懐しの府中夏の合宿である。

合宿参加者：3年　関彦太、中川桂次、片山不二臣
　　2年　城戸昌夫、高村眞司、横山　修
　　1年　安藤泰吉、小松行彦、田辺隆一、寺田格郎
　　土肥　健、名出頼男、中島　裕、中村公達
　　山領健二、横倉千穂

2．戸塚合宿（昭和24年3月22日～30日）

サッカー部2度目の合宿は、横浜市戸塚だつた。夏の合宿の成果として、前年秋の第3部リーグ戦で5戦全勝、十高は東京都新制高校第2部に昇格した。当時の部員は併設中の3人を含めて19人、このうち3年生3人が卒業したあとに残った2年、1年部員だけで、春の合宿を実施した。2部への昇格に気を良くして、5月の新憲法発布記念大会と秋の2部リーグ優勝を目指した。手元にある当時のメモには、以下のように書かれている。

所在地　横浜市戸塚区新橋町　観音寺梅田方
練習所　横浜市戸塚区阿久和　原小学校校庭
所持品　蹴球用具、米三升五合、しょう油一合、味噌50匁、塩50g、砂糖20匁以上、毛布一枚、洗面道具他

3月22日午前10時　東京駅横須賀線ホーム有楽町寄階段集合
10時17分発
戸塚駅にて阿久和行きバス　17円

3月22日　曇　今にもひっくり返えるようなバスで12時頃寺に着く。本堂中央に大きな提灯あり。土岐さんの母上のお話通り、荘厳でちょっと騒げそうにない。本堂の横に新しく畳替えした18畳の部屋、即ち我々の寝室に座禅の時に人をたたく棒が置いてあった。

昼から先ず薪を取りに隣町へ行く。帰りに横倉、中島と3人で出し合って50円のゴムまりを買い、皆と球ブツケをしたら割れてしまった。それから逆の方へさつまいもを取りに行く。そのついでに学校へも行った。せまいグランドで生徒は珍らしそうに我々を見た。帰路は畠から山中に入り、近道という遠道をして5時頃帰寺。夕飯は1年で飯焚きをする。夜ピンポンをする。高村さんはバスに乗り遅れてあとから来た。

メモは、他にピンポンで中島が優勝したとあるだけだがあの頃の記憶を甦らせるのに十分である。

この合宿中に母親に宛てた葉書では、練習は朝8時30分から夕方の5時までで24日から開始しており、この日は小学校の卒業式だったとある。宿舎に戻り腹ペコで友達から貰った飴で僅かながら満足したとか、寺の周囲は小高い丘に囲まれ修養にはもってこいの場所だが新聞がないので一週間もいたら知識が遅れそうだとも記してある。

合宿をこの場所にしたのは、土岐先輩の御父上の御配慮による。合宿の第1日には母上が御一緒なさって下さったと記憶する。その頃、高校生の、ましてやサッカーの合宿ができるような場所は容易にみつからなかった。戸塚駅からバスに揺られてガタガタ道を1時間ぐらいかかったろうか。現在は相模鉄道いずみ野線が開通し、多少開発されたとはいえ、今でも辺鄙な山の中といった感じのするところである。

観音寺は禅寺で大きかった。本堂に向かって左側面から出入したが、ここに下駄箱が置かれていた。その脇は裏山の墓地に通ずる山道になっていた。下駄箱で思い出すのは、翌朝高村さんの靴が盗まれていたことである。溜め色をした高級な革靴で、アメリカ土産だったという。人が歩きそうもない寂しいところにも盗人がいたとは、当時の日本はまだ貧しく、田舎の人にとってもあの靴が眩しかったのだろう。

現在、観音寺も壮大な寺院に建て替えられ、この辺りは戸塚区でなく泉区と変った。さらに練習をした原小学校は瀬谷区に属し、観音寺から小学校に行く途中に新幹線が走っている。道路こそ舗装されているが、道幅は大して変っていないし、横須賀線戸塚駅からのバスも相変らず通っている。しかし今でも思うのだが、寺から小学校迄は随分遠かった。距離にしておよそ1.5キロ、当時は滅多に車など通らない静かな田舎道だった。山の間の裏道などを歩くと農家が点在していたし、どの家でも大きな犬を飼っていて、すぐに吠えられ一寸怖かった。山の上というか、丘の上というか、そこに学校があった。学校はまだ春休みに入っていなかったためか、われわれが最初に行ったときに小学生たちが集ってきた。城戸さんが、子供たちの前で得意気にボールを大きく蹴った。ボールは校舎の2階の窓ガラスに当り、ガチャンと割れた。

寺と小学校との距離が遠かったので、午前午後の練習の往復、とくに帰り道を遠く感じた。

練習の後だからだろう。練習では、ゴールの前に一人立って周囲から蹴り込まれるボールを防ぐのが少々きつかった。そして最後はゴールキーパーの番となる。蹴る方はいい気なものだが、受ける方にとっては酷である。GKの小暮雅一君が涙を出しながら練習に耐えているのを見て同情心が湧いた。心を鬼にするのが辛らかった。

春の合宿は夏に比べて寒い。今にしてみれば、毛布一枚でよく我慢できたと思う。食事も自炊だった。大勢で食べる夕食の味噌汁に、卵が一つということがあった。大きな鍋の中に山領健二君が、その卵をポンと割って落とした。溶いてから落せばよいものをと思う一方で、山領君の育ちのよさを感じた。卵の黄味が誰の椀に入るかと、その夕食時は賑やかだった。寺の五右衛門風呂を沸かすのも当番を決めた。ひそかに煙草を持ち込んだものがいて喫った当人がゴホンゴホンと煙にむせた。昔から合宿ではありがちの話だが、新学期になって体育の平山清太郎先生から「合宿で煙草など吸うんじゃないぞ」と冗談まじりにいわれた時、誰かがしゃべったなと感じたのも高校時代の懐かしい思い出の一つだ。

合宿中、宿舎の観音寺で、きょうは文化財調査があると聞いたことがあった。練習に出ている間に調査は行われたが、私は何か由緒あるものがこの寺にあるのかと興味を持った。半世紀を経た過日、観音寺を訪れた際、門前や境内にそれらしき文化財の案内は何も建っていなかった。調査はしたもののおそらく大したものが無かったのだろう。

合宿参加者　城戸昌夫、高村眞司
小暮雅一、横倉千穂、中島　裕、小松行彦、名出頼男
山領健二、寺田格郎、田辺隆一、中村公達
OB　片山不二臣、本領泰弘

3．伊香保合宿（昭和24年8月7日～15日）

第3回合宿は夏の伊香保温泉だった。宿舎は旧御用邸で当時は文部省の保養所として利用されていた。3年の城戸昌夫さんの縁故で宿舎にしたのだが、全員が文部省関係者の名前を使った。「管理人の前では決して本名で声をかけるな」と城戸さんにいわれた。山領君がそれをつい忘れて「城戸さん、城戸さん」と何回も声をかけたが、目前の城戸さんは返事をしないといった笑い話が残っている。御用邸だったことから、建物は木造でも廊下や階段に絨毯とまでは行かぬ赤い布が敷かれていた。縫い目に保革油を塗ったボールを置いたりしたものだから、おそらく顰蹙（ひんしゅく）を買ったことと思われる。メモによると13日以降は、グランドとして使用した伊香保小学校へ宿舎を移している。

上野駅9時10分発上越線渋川行きに乗り伊香保の保養所には7日の午後3時10分に到着した。思ったより蒸し暑く、小学校は下の方にあるので練習のあと宿舎に戻るだけでシャツは汗ですぐにぐしゃぐしゃになってしまった。グランドから遥か彼方の山を眺めると榛名山行きのバスがゆっくりと登ってゆくのが雲に霞んで見えた。最終日にはあの山に登ろうと望みを抱き、練習は辛くても我慢しようと思った。温泉町なので夜になると近くの旅館から三味線の音が聞こえてきた。戦後4年ともなれば遊び人もいるのですねと自宅に出した葉書に書いてあった。

参加部員が用意したものは、費用1000円、米3升、しょう油1合、みそ50匁、それに旅費、東京・渋川間が学割で片道90円、渋川・伊香保間の電車片道22円で、バスだと30円、全員電

車を利用した。アイスクリームやキャンデーが10円の時代である。

合宿参加者

コーチャー　東京蹴球団（旧師範OB）　石川正清氏
MTQ（旧東京高校チーム）　黒田尚次氏
OB東京大学　関　彦太氏

3年　高村眞司、城戸昌夫、横山　修
2年　田辺隆一、横倉千穂、中島　裕、小松行彦、中村公達
寺田格郎、小暮雅一
1年　小畑順生、星　守雄

コーチャーとして迎えた石川さんは、学芸大学OBで土岐先輩の紹介だった。土岐さんの妹さんの通っていた小学校の先生と伺っている。それに従来の黒田さん。MTQとあるのは、旧制東京高校OBチームがMTRなので、その一つ若いという意味でRをQにしたと聞いている。この春に東大に入りサッカーを続けている関さんの水色の半袖シャツに紺のズボン、学帽姿を見た時、羨望の念を抱き大いに励されるものがあった。

練習は、午前2時間、午後3時間、または逆で、種目はランニング2回、2回目は中にダッシュを含む。ダッシュ約30メートル、ターン（前後左右）、ドリブル2回、パス2回、小サークル、大サークル、フォワードシューテング、バックスピンチキック、ヘッディング、ストップピンク、フォーメーションとメモにある。

石川さんのコーチで思い出すのは、キックしたボールが目指すところをはずれた場合、「方向に注意しよう」と掛け声をされたことだ。蹴った方も「あっいけない」と思っている訳で、「どっちへ蹴っているんだ」と怒鳴られるよりは心に傷がつかない。小学校の教員とうかがっていたが、同じことをいうのでも、こういう指導もあるのかと受けとめた。

榛名山麓の伊香保といえども、夏の練習はのどが渇く。練習の休みに水飲み場に殺到した。大きな柄杓で飲むのだが、高村さんが何杯も口にしていたのが印象に残っている。高村さんは、それなりに顔から汗がにじみ出る方だった。メモには書いてなかったが、練習で何回も1対1をやらされた。高村さんを相手にすると、どうしても抜かれてしまう。だからというわけではないが、中島裕君とよく当った。中島君も上手かつたが、同じ学年という気安さがあった。

グランドは石というか、岩のかたまりがあちこちに埋まっているようで、スパイクのポイントがすぐ痛んだりとれたりしてしまった。当時のスパイクは、すべて皮だったので、夕方皆で靴屋を探して修理に出した。メモには修理費120円と記録されている。高い値段だった。温泉地なので下駄を履いて靴屋に出かけたが、夏の夕方なので毎日のように俄雨となり、駆け出して宿舎に戻った。その日買ったばかりの下駄が割れてしまって中村公達君がぶつぶついっていたのも可笑しかった。

食事は、文部省保養所でも、小学校に移ってからも自炊だった。小学校でカレーライスをつくったが、脂が多すぎて食器を洗うのに苦労した。温泉地だが、小学校なので湯が出ない。クレンザーがわりに土をまぶしてベトついた食器を洗ったりした。

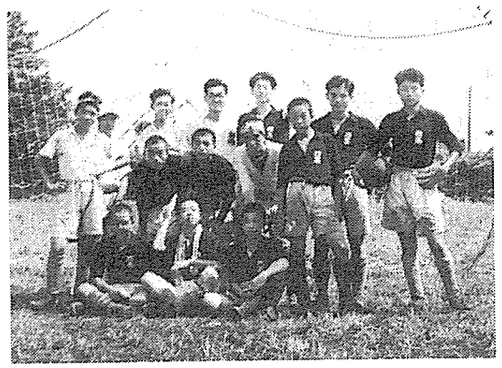
伊香保小学校々庭は火山灰で硬くスパイクの鋲がすりへるのが早く修理が大変だった。数少ないボールも外皮が破れかろうじて5個が使用に耐えた。

合宿を終えて10日後、8月25日（木）に都立十三高（現豊多摩高校）と練習試合をした。グランドは先方である。結果は2－0で敗れた。合宿後初の試合で敗けたので主将の高村さんの機嫌が悪かった。CF中島君が欠場し、バックスの名出頼男君がその穴を埋めた。中島君は当日試合を見学しているので、欠場には何かわけがあったに違いない。私たち十高のキックオフで始まったが、名出君の出したボールが高村さんに届かず、それを素早くとった相手に中央突破され、シュートを打たれた。キーパーがこれをハンブルし、それを右足でクリアしようとした私がミスキックしてオウンゴールになってしまった。開始後1分のことだった。さらに前半追加点をとられたとメモにある。後半、高村さんの独走で漸く1点をとりかえしたが、これはキーパーチャージの反則をとられて、認められなかった。後半は0－0だった。合宿後の第一戦は惨めだったが、秋のリーグ戦ではついに2部優勝を遂げ1部に昇格、高村主将他3人の先輩は悔いを残すことなく卒業したのだった。

GK　城戸、LB　田中、RB　小畑、LH　寺田、CH　小松、RH　横倉、LW　中村、
LI　横山、CF　名出、RI　高村、
RW　田辺、　見学　中島、梅元　OB　関

4．保谷合宿（昭和25年8月8日～18日）

都リーグ1部に昇格したこの年も夏の合宿を実施した。教育大学に進学した城戸さんの世話で、保谷にある教育大学の合宿施設とグランドを借りることができた。1年の時からのサッカー仲間は、3年になると受験勉強にいそしみ退部者が増えた。3年で合宿に参加したのは、小松、小暮、山領、寺田の4人のみ。2年部員が浜田、小畑、柳沢、秦君ら4人、1年が恩田君1人計9人の合宿となった。しかし、サッカーを通じてできた友情の絆は、そう簡単にゆるむものではない。受験勉強中の浪人先輩、高村、横山の両氏、それに3年の中島、横倉、名出、中村の諸君が、何日か合宿へ顔を出してくれた。



保谷のグランドは草芒々でボールがイレギュラーバンドをするので、教育大でもサッカー部は使用せずラグビー部のグランドだった。
もっとも西高のボールはいびつでイレギュラーバンドは常のことだったが……。

コーチは黒田さんで、彼も東京高校を出て名古屋大学に入っておられた。旧東京高校の仲間も合宿に来て下さった。１年先輩の城戸さんがずっと面倒を見て下さったのはいう迄もない。岡田信吉先生も来られたし、体育の平山清太郎先生も水瓜を持って激励に来て下さった。

合宿の最中、２年部員の１人が急に家に帰るといい出した。私は主将としてこれをどうやって引きとめるか困ってしまった。理由を聞くとタオルを取りに帰るという。彼もいろいろと理由を考えたのだろう。その場は説得したことだけ覚えている。合宿は地元で実施するな、といわれた訳がわかったような気がした。高校生ではどうしても里心がつく。遠い離れたところなら容易に帰れないので、我慢をするというか、物事に耐える心を養うことになるのだろう。

ここでも自炊だった。朝食をつくるのに、飯炊き釜の薪になかなか火がつかず困ったこともあった。合宿所には教育大教授の中島海先生が舎監のような立場で住んでおられたが、この先生には、何となく畏敬の念を抱いた。浴衣姿でも威厳のある方だつた.

合宿して楽しかったという思い出が、この保谷に関しては残っていない。自分にリーダーシップをとる力量がなかったのか、未だに気になっている。

それが原因か、秋の一部リーグは惨憺たる結果に終った（６チーム中５位）。幸いにして記録が残っていないが、情けない結果だった。悔いていることが一つある。この公式戦で、私はどうしても勝ちたいと思った。そこで、リーグの初日だったがサッカーから遠のいた同期の仲間に声をかけて援けを求めた。試合当日、いつも練習している１・２年部員をその日のメンバーから外したのだった。昔の仲間の力を借りれば勝てると思ったのは、浅はかな私の間違いだった。試合終了後、どうせ敗けるのであったなら、いつも練習にきている部員で戦えばよかったと思ったものの、後悔先に立たずである。一旦身につけたユニフォームを納得できないような顔をして脱いだ１年生、恩田耕、山本光伸両君の顔つきは忘れられない。場所は、大泉高校のグランドだった。これだけは、私にとって一つの教訓として脳裏にこびりついている。

(95. 2. 26記)

クロさんの想い出

西高３期　中島　　裕

クロさんこと黒田尚次さんに出会ったのは、確か昭和23年の西高の府中での合宿（西高サッカー部の最初の合宿）だったと思う。

先輩の秋岡さんと土岐さんのお二人が旧制東京高校に進学され、同校のサッカー部のキャプテンであった黒田さんがコーチとして来て下さったのだった。

クロさんの練習は今迄仲間だけで適当に（といっても自分達はきちんとやっていたのだが）やっていた練習とは異なり仲々きびしいものだった。正に黒船の到来、私にとっては（多分私以外の人にとっても）ものすごいカルチャーショックを経験した。

これを契機に西高サッカー部は強くなり、短期間に東京都リーグ三部から二部、一部と上昇していった。そういう意味で西高サッカー部の今日の歴史と力はクロさんに負う所が非常に大きいと思っている。

クロさんは当時高校一年の私にとっては大人の世界の人という感じであったが、にこやかな笑顔を絶やさず、グランドの罵声からはとても想像できないとてもよい人であった。一度、西高が東京高校と練習試合をしたことがあった。クロさんはセンターハーフ、私はセンターフォワードでぶつかる事になったが、仲々球を持たせてもらえず、きつい思いをし、さすがと感心した。

その後、おそらく全日本選手権大会の予選だったと思うが、全東京高校（MASTERS）がWMW（全早大）と対戦する事があり、試合を見に行ったのだが、東京高校はWMWに手もなくひねられて、早稲田の強さが印象に残ったのを覚えています。

最後にクロさんと試合をしたのは、神宮競技場（現国立競技場）で行われた全日本選手権大会関東予選で、私が東大の一員として関東実業団の雄日立本社と対戦した時のことです。

この日の東大は、岡埜俊一郎氏（IOC委員、日本サッカー協会会長）がインナー、私がセンターフォワードの布陣（私がインナー、彼がセンターフォワードというのが比較的多かったのですが)、クロさんは日立のセンターハーフとして出場され、私ともろに当たる事になりました。試合の結果は忘れましたが、クロさんは年のせいかやや身体が重く、私は伸び伸びとプレーをさせてもらった事を覚えているので、多分我々が勝ったのではないかと思っています。

これは人の好いクロさんの笑顔と共に私の記憶の中にしまってある楽しい想い出です。

我らが青春の思い出

西高4期　合同執筆

4期、5期は不毛の年代でした。常にメンバー不足に悩まされ、安心して試合ができる状態ではなかった。これは2・3期の隆盛時期の反動でした。又、学制改革の影響で4期は旧制中学の最後で、都立第十高等学校併設中学を経て自動的に西高校、5期は新制中学の最初であり、実質的な最初の西高生でした。4期の中でも十中からの人と高校から入った人の気風の差があり、西高の雰囲気は雑多なものでサッカー部の中だけが、ややまとまった雰囲気だったような気がしました。縦割りの連帯感のようなものがやっと出来かけ始めた時期でした。

十中、第十高等学校併設中学、西高とサッカー部には6年間いた事になりますが（多分一番長くサッカー部にいた事になります）、試合に出られる様になったのは高2、3年になってからで、試合の思い出は、メンバー不足で悩んだ事位で、試合内容は残念ながら、殆ど覚えていませんが、充実した高校時代を過ごした事だけは確かです。

4期のメンバーは、浜田（主将）、馬場、平沢、佐久間、秦、柳沢、5期は、恩田、末常、6期は、春木、高橋、山家などで、このメンバーがそろっていた訳ではなく、何時も助っ人を捜して試合をした様な記憶があります。3年の合宿は無かったと思います。2年の夏の合宿は保谷市の教育大学のグランドで行いました。このグランドは今は文理大公園になっています。

昭和20年代の蹴球は、手造りのスポーツでした。ボールを蹴り始めるまでのボールの空気入れに約30分、スパイクシューズは年中修理が必要でした。

ボールは今のようなチューブレスではなく、チューブと外皮とに分かれているので、くつひもを締めるように口を締めるのが、一仕事でした。ニードル（通称十手）で、内側のチューブを突きやぶらないように、皮ひもを通すのが面倒な仕事でした。

シューズは、丸く切り抜いた皮でスパイクを積み上げ、釘で打ちつけているので、小石まじりのグランドではすぐに減ってしまい、年中修理が必要でした。くつ屋で修理するのも金がかかるので、自分で皮を切って釘打ちをすることもしばしばでした。

20年代後半のスパイクシューズの値段は3千円位でしたが、現在の感じては4～6万円位かと思いますが、親の立場では、それ以上だったと思います。又その頃のスパイクシューズはつま先は硬く、トーキックをしても爪が痛まなかったように思います。

当時の試合相手はあまり覚えていませんが、北園、小石川、両国、大泉？、教育大付属？、成蹊？だったような気がします。1部から落ちる事がなかったので勝ったか、引き分けたはずですがよくわかりません。北園高校とは11－0で負けた（前年は12－0で負けた）ことだけは忘れることができません。こんな負け方は生涯のワースト記録です。私の個人的な理由で試合ができた事で満足はしていましたが、勝って満足した記憶がないのは都合の悪い事は忘れてしまう人間の特性によるものと思います。

（柳沢　啓三）

中学1年から川越中学で蹴っていたが、高1の秋に転校して来てすぐに入部、2年の秋リーグ戦終了後3年生は全員やめて、キャプテンをやらされた。毎日3時間目には弁当を食べてしまい、昼休みには全校生自由参加の混成軍で、校庭中フルにサッカーをやったのが昨日のように思い出されます。そして夕方には部の練習もほぼ毎日やっていたと記憶しています。

（浜田　邦雄）

私は高2の時に転校して来て、誘われて、嫌いじゃないので、のめり込んでしまいました。基礎がないので、馬力だけが頼りで、専らキックアンドラッシュ、ドリブルなんかすると取られてしまうので早目早目にパスを出してしまう。でもサッカーは楽しかった。面白かった!!。とうとう3年のリーグ戦が終わった時は予備校にも行かず、その後あっさり浪人する羽目になりました。でも“吾が青春に悔いは無し”。

（馬場　忠雄）

サッカー人生のスタート

西高5期　恩田　　耕

私が入学した昭和25年は、朝鮮動乱が勃発し、騒然とした時代であった。

4期生（柳沢・星・小畑等々）は昭和21年（終戦の翌年）中学1年生に入学すると同時に、関、城戸、寺田等々の大勢の先輩に、みっちりシゴかれながら4年間は試合になかなか出してもらえなかった。

さて雌伏4年、昭和25年恩田、末常が入学し一緒に練習を始めたが、秋のリーグ戦が始まる時には、あれ程大勢いた筈の3年生は殆ど姿を消し、2年生まで受験のために出て来ない者もいて、急造、補強に四苦八苦のチーム造りとなった。それでも26年秋のリーグでは,浜田、柳沢、馬場、平沢、佐久間、宮田の3年生を中心とし、末常、恩田、春木高橋等のメンバーで東京都1部リーグ6校中同率ながら3位の戦績で,1部リーグの座を守ったのが今でも我々の「青春の誇り」となっている。

27年になると事情はさらに深刻化し、1部最下位となり、ついに入替戦にも破れる羽目になってしまった。しかし翌年にはリーグ制そのものが無くなり、地区別制となり、二部で戦うことはなかった。

用具もグランドも現在と比べると雲泥の差があるが、サッカーに明け暮れた高校時代であった。その中で、一番思い出に残っているのは、25年の夏、城戸先輩のお世話で、保谷の教育大（現在の筑波大）のグランドをお借りしての合宿である。生まれて始めての合宿で、しかも三食とも自炊しながらのものであった。合宿中諸先輩が激励に来られたが、西瓜の差し入れが、何ともうれしかった事が鮮明に思い出される。私の長いサッカー人生のスタートの一駒である。